HOKKAIDO UNIVERSITY HOSPITAL
地域医療連携福祉センター
NEWS LETTER
No. 12

北海道大学病院腫瘍センター市民公開講座開催

北海道大学病院では、平成23年8月27日(土)に、札幌市教育文化会館において、第1回市民公開講座「大腸がんを知ろう！」を開催いたしました。この市民公開講座は本院における大腸がんの診断と治療に関する最新の情報を提供し、大腸がんに対する知識啓蒙を図るために実施したもので、当日は約230名の参加者で埋め尽くされ、大変盛況裡に終了いたしました。

公開講座では、第1部として第三内科小林医師による「大腸がんってなーに？―知ってほしい大腸がんの知識と見つけ方」、第一外科高橋医師による「大腸がんの外科治療」、腫瘍センター川本医師による「大腸がんの薬物療法―大腸がんを薬で抑えよう！」と題した3講演と、第2部としてがん看護専門看護師、医療ソーシャルワーカーを加えた「大腸がんを知ろう！～治療から日々の生活、医療費の実際」と題したパネルディスカッションの二部形式で行われました。

第2部のパネルディスカッションでは、あらかじめ寄せられていた質問をもとに、担当するパネラーがQ＆A方式で回答していきました。質問は、内視鏡検査に関する疑問、手術の適否、抗がん剤の副作用や生活面、治療費や医療費制度まで多岐にわたり、限られた時間の中でできるだけ多くの情報を提供できるよう、パネラーが的確に回答していきました。参加者もメモを取ったりしながら真剣に耳を傾けられていた様子で、終了後も、講演者に質問する姿が見られました。

消化器がんは、大変多く、癌全体の半分以上を占めるものと思われます。北大病院では、そういった消化器がんを診断から治療まで、最良の医療の提供ができるよう心がけています。難しい症例でも、キャンサーボードでの複数科のメンバーによる相談で適切な治療が実施可能です。また化学療法部にて安全かつ効果的な抗がん剤治療を外来で受ける事も可能であり、働く患者さん達も安心して治療を受けることができます。また新薬治験も多数実施しており最先端治療を受ける事も可能です。

今後も大腸がんだけでなく、他のがん種に関する市民公開講座を定期的に開催していく予定です。

神経内科外来の紹介

外来医長　加納　崇裕

神経内科では、脳、脊髄、末梢神経、筋の器質的･機能的異常による疾患に対し専門性の高い医療を提供しています。心療内科や精神神経科などいわゆるメンタル面を診ている科とは診療範囲が異なりますのでご注意下さい。治療対象疾患はパーキンソン病や脊髄小脳変性症といった神経変性疾患だけではありません。血管障害、感染症、中毒疾患に加えてサルコイドーシスなどの肉芽腫性疾患、糖尿病や膠原病など内科疾患に伴うものといったように多様な疾患が原因となります。神経症状は病変の部位により多彩なので神経疾患を疑われたときは是非ご紹介下さい。

一般外来･専門外来

日本神経学会認定の専門医による問診と神経学的診察によって局在診断、鑑別診断を行い、筋電図や脳波などの電気生理学的検査、MRIやSPECTなどの画像検査を行って確定診断し治療方針を決定します。必要な場合は入院による精査、加療も行います。また頭痛、不随意運動、重症筋無力症、高次脳機能については専門外来を開設しています。専門外来への受診の適応は当科で判断しますので、まずは当科の一般外来へご紹介下さい。

筋疾患に対する筋病理診断システム

診断が困難な筋疾患に対して、当科では筋生検から標本作製まで一貫して科内で行い専門医による評価を行っています。そしてネット会議システムを利用してカンファレンスを開催し関連病院の専門医と検討することで結果を臨床と教育にフィードバックしています。

筋病理カンファレンスの様子

ボトックス療法･バクロフェン髄注療法

当科では眼瞼痙攣、片側顔面痙攣を対象にボツリヌス毒素の局所注射によって症状の緩和をはかるボトックス療法も行っています。脳梗塞などにより四肢の腱反射が亢進しいわゆるつっぱった状態を「痙縮」といいます。ボトックス療法はこの痙縮にも適応が広がりました。適応と思われる症例がおりましたら是非ご紹介下さい。

また広範囲の痙縮に対して抗痙縮剤のバクロフェンを腹部のポンプから直接髄腔内に持続投与するバクロフェン髄注療法を脳神経外科と協同して行っています。入院してポンプ埋め込み･カテーテル留置を行った後は外来通院で調節が可能です。痙縮の軽快によりADLが向上するだけでなく疼痛や締め付け感の改善が得られた症例もおります。このように新しい治療法の導入にも積極的に取り組んでいます。

ボトックス療法

ご紹介いただく際のお願い

新患は月～金曜の毎日午前に受け付けていますが、毎週火曜日は当番医が交代で診療しているため大変混み合います。ご紹介いただく際には火曜日を避けて頂くようお願い致します。また医師を指定してのご紹介には対応できかねますのでご了承下さい。

皮 膚 科

皮膚科外来診療のご紹介

助教　藤田　靖幸

皮膚科外来は木曜日を除く平日の午前中に、一般外来を行っています。初診一般外来では、予約外で受診される患者さんのほか、地域連携室や近郊施設等からの紹介患者さんを積極的に受け入れております。地域施設では対応の困難な、表皮水疱症などの重症遺伝性皮膚疾患、重症薬疹、水疱症、腫瘍性疾患などを中心に診療しております。患者さんに対して正確な診断を行い、最も適した治療を遂行することをモットーとしております。今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

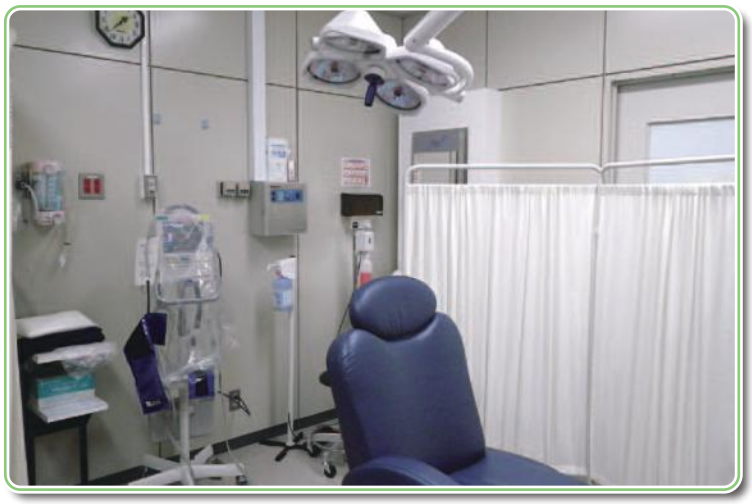
皮膚科外来状況

初診の患者さんにつきましては、基本的に第1診察室で経験豊かな専門医による診察になります。初診患者数は月200人前後、うち紹介患者は月100人前後で推移しております。診断が確定し、病勢がある程度落ち着いている患者さんにつきましては、近隣施設との連携も積極的に推進しております。また、膠原病や神経線維腫症など、全身性疾患の初発症状として皮膚科を最初に受診される患者さんも多く、他科の先生方とも連携しながら診療にあたっております。2010年度の総外来受診者数は16,590人でした。先生方の御協力に感謝申し上げます。

初診一般外来の様子です。

皮膚科専門外来

皮膚疾患は炎症性疾患から皮膚悪性腫瘍まで幅広く、それに伴い当科では、一般外来に加えて様々な専門外来（遺伝相談、薬疹、皮膚外科、乾癬、レーザー、紫外線）を開設しております。これらにつきましては、基本的に一般初診外来で診察を受け、専門医による判断の上で専門外来の受診をすすめさせて頂いております。



小手術室。日帰り手術も推進しています。

乾癬などに対して全身紫外線療法を行います。

臓器移植医療部の紹介

准教授　部長　嶋村　剛

臓器移植医療部は2002年7月、国立大学病院としては京都大学に次いで全国で2番目に、移植医療の定着と発展を目的として新設されました。現在、北海道における臓器移植希望患者（肝臓、膵臓、小腸、腎臓）に対して、手術・術後フォローはもとより術前（待機中）から専門的な治療を行っています。肝移植の対象疾患は成人でB型やC型肝硬変、胆汁うっ滞性肝硬変、劇症肝炎、肝癌、小児で胆道閉鎖症、代謝性肝疾患、劇症肝炎などとなっています。膵腎同時移植は、腎不全を伴うI型糖尿病患者が対象となり、小腸移植は種々の原因による小腸機能不全患者が対象となります。

スタッフ

部長を嶋村剛准教授が務め、山本真由美・坂井絢レシピエント移植コーディネーターを主要スタッフとし、鈴木友己（分子制御外科学講座准教授）、2011年1月に新設された移植外科学講座の藤堂省教授・山下健一郎准教授、太田 稔 臨床工学士（ME機器管理センター）と綿密に連携しながら、肝移植、膵移植、小腸移植の臨床を行っています。

※患者さんから了解を得て掲載しています

実　績

2011年10月までに肝移植246例（生体肝移植224例、脳死肝移植20例、ドミノ肝移植2例）（成人180例、小児66例）、膵腎同時移植3例を実施してきました。なかでも脳死肝移植には開設当初から積極的に取り組み、実施数は全国で2番目に多い施設となっています。生体肝移植の5年生存率は成人で75%、小児で95%、脳死肝移植のそれは75%となっています。北海道における急性あるいは慢性の末期肝臓病患者、I型糖尿病患者、小腸機能不全患者の救命を目標としてきましたが、過去において内科的治療で救えず死亡したり、道外へ行って移植を受けていた患者を北海道で救命できるようになりました。

各科との連携

移植手術の実施に際しては多くのマンパワーが必要となりますので、上記の主要スタッフのほかに消化器外科Iに所属する若手・中堅のドクターのサポートを得ながら行っています。術前・術後の管理も消化器外科I病棟である7－2病棟が中心です。一方で手術部、集中治療部、病理部、検査部など多岐にわたる関連各科の協力なしには実施が困難であり、病院の高い総合力に裏付けられています。

今後の展望

2010年7月の臓器移植法改正を契機に脳死下での臓器提供が著明に増加しています。法改正後現在まで全国で65例の脳死下臓器提供が得られましたが、このうち8例（12.3%）が道内での提供となっており、人口比は全国平均の3倍以上となりました。また、北海道における献腎移植数は昨年1年間に27例を数え、腎移植希望患者に占める実施数は5.4%と全国で最も高い地域となっています。これらは、臓器移植医療部が北海道移植医療推進協議会と連携し10年余にわたり継続してきた啓発活動の成果と考えており、これらの臓器提供数の増加に応えるべくさらに努力して参りたいと思います。

道内の肝移植、膵移植、小腸移植実施認定施設は北海道大学病院に限定されています。移植希望患者のご紹介はもとより、移植患者の術後フォローアップでも広い北海道をカバーするためには、地域医療連携が不可欠となっています。紙面をお借りしてこれまでの御協力に深く感謝申し上げるとともに、今後も変わらぬご支援を賜ればと存じます。

咬合系歯科（歯冠修復専門外来）

歯冠修復専門外来の紹介

外来医長　田中　享

歯冠修復とは齲蝕（虫歯）などによって生じた歯の欠損部を人工材料によって補塡し、歯の形態、機能、審美性を回復することを目的とします。当外来は歯科診療センター2階の咬合系歯科A診療室の中にあり、歯冠修復を含め根管治療（歯の根の治療）、軽度の歯周病の治療、歯の漂白（変色している歯を白くする）等の治療を行っています。

歯冠修復について

齲蝕の進行が歯の象牙質に限局している場合は、齲蝕部を除去し充塡材料（詰め物）で補塡します。その材料としてはコンポジットレジン、グラスアイオノマーセメント、セラミック、金属等があります。

近年、MI(Minimal Intervention Dentistry :最小限の歯科治療)の概念が普及しており、当科においてもその概念に沿った治療を心がけています。治療の概略としては、齲窩形成（虫歯によってできた穴）がない初期の齲蝕には再石灰化処置（溶けた歯のミネラルを元に戻す治療）を試みます。しかし、これによって、齲蝕の進行が抑制できない場合に、必要最小限の切削（歯を削ること）と充塡材料での修復を行い、齲蝕の初発、再発の予防に重点を置いた処置を優先的に行うようにしています。

また、口腔内への審美的な要求が高まってきており、当科の範疇では金属色の充塡材料が気になる方々が増えてきています。この場合は歯と同じ色の充塡材料（コンポジットレジン、グラスアイオノマーセメント、セラミック等）を用いますが、それぞれ長所、短所があり各々の症例に合った材料を選択して治療しています。歯それ自体の色が何らかの理由で変色している場合には、漂白処置を行っています。薬剤を塗布して歯の色を白くする方法であり、数種の薬剤を適宜選択しながら行っています。しかし、適応に制限がありその場合は歯冠修復等での対応を検討させていただいております。

変色した金属色の修復物を歯冠色の修復物に再治療

感染予防のための治療

医科からの紹介を受け、骨髄移植や臓器移植前の患者に対する感染予防のための治療、口腔の健康管理を行っています。これらの治療は、当科外来単独で行うのではなく、歯科の各診療科のスタッフがお互いに連携を取りながら実施しています。医科と歯科の病院統合以来ますますこのケースが増えて来ていることに伴い、治療のシステムの改善にも取り組んでいます。治療は入院期間中に行うことが多く、期間内にすべてが終わるわけではありません。その場合は地域の連携病院の先生に治療の継続をお願いすることがありますので今後ともどうぞよろしくお願い致します。

歯冠修復専門外来入口

外来風景

北海道大学病院緩和ケア研修会開催

北海道大学病院では本年度もがん診療連携拠点病院の活動の一環として、平成23年6月25日（土）、26日（日）に医学部学友会館フラテ大研修室において、平成23年度北海道大学病院緩和ケア研修会を開催しました。

本年度も多くの参加希望がある中から、院内・院外の医師・歯科医師・コメディカルスタッフあわせて36名が受講しました。

本研修会は講義形式の研修と違い、ロールプレイ、症例検討などが設定された多彩で非常に能動的なプログラムとなっており、なかでもコミュニケーションロールプレイでは、医師・歯科医師・コメディカルスタッフを組み合わせたグループごとに、医師役・患者役・家族役などの役割分担をしてそれぞれの役を演じ、病気の告知をする医師、それを受ける患者を日常の職業とは違う立場からも演じることで、コミュニケーションスキルの向上と職種間の相互理解を目指すなど、非常に特徴的な研修内容となっています。

受講した医師からは「もっとつっこんだ内容の研修が良い」との意見が上がる一方、コメディカルスタッフから「ロールプレイで医師役を演じるのが非常に難しかった」という感想があり、職種間の理解レベルに差がみられた反面、「コメディカルスタッフは医師と違い社会背景を踏まえている」「双方向性で有意義」「多職種での意見交換は大変勉強になる」などの感想が寄せられ、職種間の相互理解と、診療現場へのフィードバックにつながったようです。

本院の緩和ケア研修会に関するお問い合わせは、医事課医療支援室地域医療連携係（☎011-706-5629）または腫瘍センター緩和ケアチーム（☎011-716-1161内線5659）までお尋ねください。

わかばカフェオープン

本年度より緩和ケアチームにチャイルド・ライフ・スペシャリストが着任しました。チャイルド・ライフ・スペシャリストとは、主に小児科病棟等で闘病中の小児患者やその家族のメンタルケアなど、小児に関わる様々なサポートを軸に活動します。

また、5月から毎月第2・第4月曜日を基本として、チャイルド・ライフ・スペシャリスト主催のがん患者サロン「わかばカフェ」をオープンしました。同カフェはピアサポートの一環として、お子さんをお持ちのがん患者さんを中心に、患者さん同士が治療や生活、家族などにかかわる様々な悩みや疑問を出し合い、同じ立場からの話を聞くことで、少しでも前向きに闘病生活を送れるような「気持ちの拠りどころ」であることを目指しています。

これからも、試行錯誤しながら、より良いカフェとなるように運営していきたいと考えています。

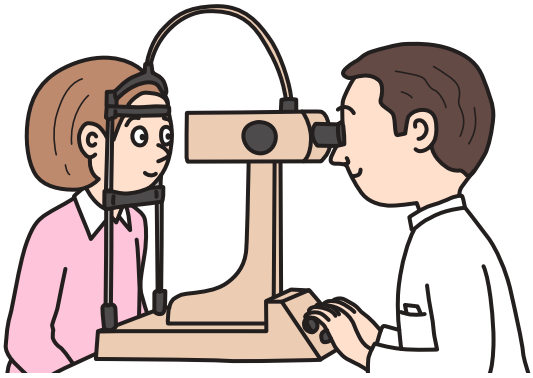
お問い合わせは腫瘍センター緩和ケアチーム・藤井あけみ011-706-5656までお願いいたします。

眼科外来からのお知らせ

平成23年7月1日から、眼科外来は新患につきましても、完全予約制へと移行しました。当院の眼科外来に患者さんを紹介していただく際には、当院の地域医療連携福祉センターにあらかじめFAXを送っていただきます(011-706-7963)。これにより新患の患者さんについても、再患同様予め予約して受診することが、可能になりました(新患:月・水・金 8:30-10:30)。

眼科新患予約制は一日のうちの新患の受診時間の偏りをなくし、さらに一日あたりの患者数の波を減らして、スタッフが効率よく働けることを最大の目的としています。導入前のように新患業務が夕方過ぎまでかかるケースは、これによって殆ど見られなくなりました。

診察については予約患者の時間を守ることが、第一としています。予約のない患者さんは、予約患者の診察の合間にだけ、診察を行うことになります。また原則、紹介状を持たない患者さんについては、お近くの同門クリニックを紹介するようにしています。



入退院センター稼働

北海道大学病院では本年11月1日から下記の4点を目的とした入退院センターを設置・稼働いたしました。

1. 入院・退院に関する基本的情報収集と相談業務を一元化・標準化し、患者さんに優しく親切な支援を行う。
2. 今後の在院日数短縮化に備え、入院・退院に関する外来・病棟双方の業務効率化を図る。
3. 患者さん一人ひとりの状況を把握し、医療費や医療福祉の相談を適時行う。
4. 入院・退院に関する事務処理常務を一元化し、医師等の業務軽減を図る。

業務内容は、段階的に拡大していく予定です。

第1段階である現在は、「入院に関する説明と手続き」「患者情報の収集・入力」「入院の連絡」「入院に関する相談(医療費等)」「持参薬受理」「退院手続き」「ファミリーハウス予約」を行っています。

入退院センターが機能することで、患者さん一人ひとりの状況に合わせた一貫した支援の充実と医師・看護師等の業務削減がすすみ、それぞれが本来の業務に専念できる環境が整備されることが期待されます。

I N F O R M A T I O N

感染制御部の紹介

感染制御部　准教授（診療教授）　石黒　信久

感染制御部の役割は、①院内で発生した感染症の把握とその対策、②感染防止対策のマニュアル作成と実施状況の把握、③感染症診療のコンサルテーション、④抗菌剤の適正使用の推進などです。感染症対策は各診療科レベルだけで行うのではなく病院全体として取り組むことが大切です。これまで、ノロウイルス感染、インフルエンザ感染、多剤耐性菌対策等々で成果を挙げてきました。

医師2名（内 専任1名）、歯科医師2名、看護師5名（内専任1名）、薬剤師2名（内 専任1名）、臨床検査技師3名（内 専任1名）、栄養士1名、事務職員4名（内 専任1名）からなるICTチームが24時間監視体制による調査データを基に様々な介入や定期的な巡回を通してこれらの任務を担当しております。私たちの働きは、良質で高度な先進医療を提供している北大病院の機能を陰ながら支えているものと自負しております。

紹介患者予約・医療機関別ランキング

【札幌市内】

①東　区　天使病院
②北　区　札幌マタニティ・ウイメンズホスピタル
③厚別区　札幌社会保険総合病院
④中央区　札幌厚生病院
⑤豊平区　回明堂眼科・歯科

【札幌市外】

①小 樽 市　市立小樽病院
②苫小牧市　苫小牧市立病院
③砂 川 市　砂川市立病院
④岩見沢市　北海道中央労災病院
⑤江 別 市　江別市立病院

・編・集・後・記・

4月から当センターに配属になりました看護師の城木三千代です。これまではずっと病棟で患者様のケアにあたっていましたが、センターで転院や在宅支援の調整という新しい業務を担い、とまどいながらも新鮮な気持ちで取り組んでいるところです。血圧計や注射器片手に走りまわっていた私ですが、今はPCと電話そして真心を必須アイテムに奮闘しております。北大病院の窓口として、患者様にとってより良い連携ができますよう努力していきたいと思いますのでどうぞよろしくお願いいたします。

発行　平成23年12月
北海道大学病院
地域医療連携福祉センター
〒060-8648　札幌市北区北14条西5丁目
TEL：011-706-6037・7040（直通）
FAX：011-706-7963（直通）
http://www.huhp.hokudai.ac.jp/relation/

医療機能連携協定について,当センターホームページにアップしました（ http://www.huhp.hokudai.ac.jp/relation/community/hospital/index.html ）。